

き、その受容層の中心に中学生がいました。たとえば、ラジオの深夜放送。あるいはYA文学のはしりともしえる北杜夫や遠藤周作、星新一、筒井康隆。「中学生文化」というか、こうした文化消費のにならない手になる一定の大きさをもつマス(集団)として、ロティーンから十四、五歳がいました。のちにオタク文化のいない手になる層です。

視聴者や読者が「われわれの世代の文化」という意識のもと、主体的にムーブメントをになう、またメディアの側も、中学生たちをターゲットにしていることで際立つ。

こうした「ロティーン文化」の盛り上がりは、九〇年代半ばくらいまでだったと思われます。ライトノベルの勃興も、九〇年代前半に中学生だった層になわれている。それから二十年近くが経ち、TVアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」がはじまったとき十四歳だった人が、すでに三十歳になろうとしている。そのくらいの世代では、「われわれの世代の文化」という意識がある。では、それ以降の「若い」世代にも、同様のものがあるのか、というと、じつはないのではないかと気がします。

マンガと子どもとの関係が、見えにくくなった

いまはロティーンがマス・マーケットとして成立していない。ここ数年、「コミックボンボン」「コミックブンブン」など児童マンガ誌の休刊が続きました。「コロコロコ

ミック」と、新興の「ケロケロエース」のみが残っています。マンガ誌以外でも、学研の「学習」「科学」、小学館学年誌と、ロティーン向け雑誌の休刊が相次いでいます。

こうしてマンガも、子どもを対象にするだけでは営業的にきびしくなり、大人も子どももマーケットとしてみる作品という方向へシフトしてくる。そこで、純粹に小学生の子どもをターゲットとする、いわゆる「ジャリマン」の世界は、かつてのように「ブーム」によって可視化される回路を失うことで、いよいよ見えなくなる。「マンガ」と「子ども」の関係は、ますます見えにくくなっている。少子化と出版不況にともなう構造的な変化です。

これは、「子どもであること」が文化的に価値を失ってきているという事態なのかもしれません。さらに、子どもであることを市場が求めなくなっていくことと、いい意味でも悪い意味でも子どもが「子ども扱い」されにくくなることが並行して起きているように思います。

「いきなり公道デビュー」あるいは「児童の消滅」

文化的なことや情報に限った話ですが、「児童の消滅」ともいべきトレンドが、できつつあるのではないか。

児童雑誌など子ども専用の文化・情報領域がなくなってしまう、ある種の緩衝材なしに、いきなり「世間」に出ることになる。自動車にたとえれば、教習所の中で練習を